

連載16 「人は、認めてあげれば、頑張ることができるようになる」

もう20年近くも前のことだが、くっきり思い出すことがある。それは、今上天皇の内親王愛子様が3才の誕生日を迎えるのにあたって、今上天皇がその記者会見でご紹介されたアメリカの家庭教育学者ドロシー・ロー・ノルトの「子は親の鏡」と題された詩のことである。それはたった一編の詩なのだが、その詩の中には、子育てのエッセンスが詰まりに詰まっていて、しかも世間の子育ての常識に真っ向から立ち向かうようなメッセージが盛り込まれていて、それを「愛子はその名前の通り、人を愛し、そして人からも愛される人間に育ててほしい」との願いを込めた育児方針として紹介されたのだった。

例えば、「叱りつけてばかりいると、子どもは、自分は悪い子なんだ、と思ってしまう」なんていうところは、「そうだよね、良い子にしようと願って叱っても結局は逆効果なんだよね」なんて思いながら、フムフムと読むことができるし、「励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる」なんていうところは、「そうだよね、その通り。でもなかなかできずについケチをつけるようなことを言ってしまうんだよね」と思ったりしながら賛同する気持ちになる。

ところが「見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる」とか「守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ」なんていうところになると、「え！これって世間の子育ての常識の反対だよね」と頭の中で解説が必要になる。それは、「見つめている、つまり認めることだけで、本当に頑張ることができる子になるの？」という疑問に答えることであるし、「親が守っているばかりじゃ、強い子じゃなくて、それどころか弱い子になっちゃうじゃないの？」という意見に反論することなのだが。

A男さん、昨年の12月から10万円ほどする50型のテレビを買うために、小遣いの節約を始めています。まずは、知的障がいの方にとっての10万円という額の大きさをイメージして欲しいのですが、彼の年収（障害基礎年金と作業労賃との合算）が約100万円ほどと考えると、10

万円という金額は、年収の10分の1、年収400万円のサラリーマンが、それと同等の買い物をすると考えると、年収の10分の1は40万円ですから、A男さんは相当高額の買い物をする決心をしているのだと考えることができます。

購入計画を練ると、どんなに節約しても2～3年後にやっと購入できる計算になりました。小遣いは50%の減額です。

ちなみに、もう50才になろうとするA男さんですが、残念ながら今までに何回も節約には挑戦しているのですが、節約計画が成功した試しがないのです。今回も支援職員にとっては半信半疑の節約計画のスタートでした。

ところが、今回は、心配もどこ吹く風、彼の節約計画は今のところ順風満帆です。穏やかで自信ありげな表情で暮らしています。小遣いを我慢してます、苦しいです、なんていう顔を全く見せないのです。

そこで研究が始まりました。「なぜ？彼の節約計画は成功しているのか？」がテーマです。

なかなかそのきっかけは見つかりませんでした。が、「ほら、去年の夏、通所先の事業所で炎天下の農作業で、一回気持ち悪くなったことがあって、その後、A男さん、農作業、もうイヤだって初めて言えて、屋内作業に配置転換してもらるように頼んだら、よく事業所に理解してもらって願いがかなったことありましたよね」なんていう話が出てきたら、「そういえば、秋頃からかなあ、人参、嫌いだって言って残していますよね」なんていう話が出てきて、そしたら「冷たい牛乳、温めてほしい、なんて最近頼めるようになってきていますよ」なんていう心温まるようなエピソードが報告されました。実はこれってみんな「見つめる」ことであり「認める」ことであり「守っていること」なんですよ。これで研究テーマの答えがでました。「人は、認めてあげれば、頑張ることができるようになる」というわけです。「頑張り、頑張り」と鍛えることをすれば「頑張れる人」になるわけではないのです。これは、明星学園の真実でもあり、子育ての真実ということになります。